

7 図画工作科

加藤潔己・阿比留時彦

1 「感性を育む」学習で大切にしてきたこと、成果について

図画工作科教育の本質的目的

図画工作の求めるものは、創造的心情の育成である。ここでいう創造性とは科学・芸術分野という狭義でいうのではなく、一人の人格を取り巻く全てに対して創造的であるということを用いるものである。「よりよく自分の人生をクリエイトしていく力」であり、「困難に立ち向かい」、「殻を破っていく」心情の育成である。

この心情は、学校教育という枠を越えて、自分のライフスタイルの中で、つまり「生涯学習」の視点で考えるものであり、自己教育力の育成と深く関わるものである。

「自立に向かう」子どもたちの育成にむけて、創造的心情の育成は不可欠である。

その創造的心情の育成にむけて昨年までの3年間は「感性」という視点で研究を進めてきた。子どもたちの「気づきや感じ取りを育む」支援の方途を求め、題材開発や授業づくりを進めてきた。その研究経過と成果については以下のとおりである。

(授業展開の工夫)

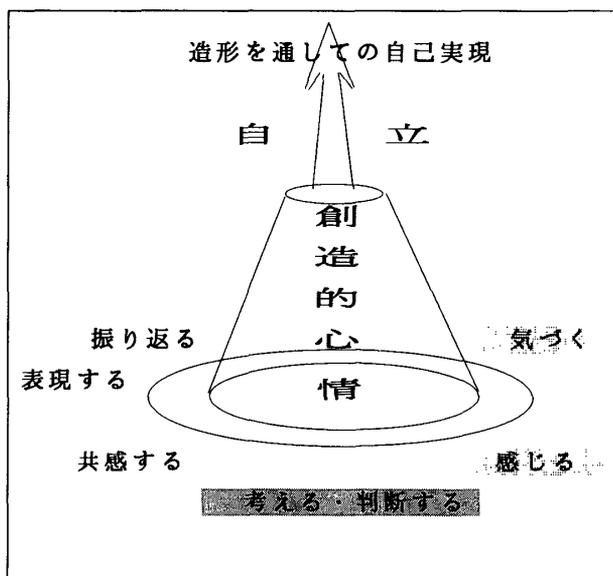
- 身近にある素材の見つめ直し（ふだん何気なく見ているものに対して）
価値のあるものへの出会いの場づくり
- イメージの形成の支援としてのゲーム活動、話し合い活動の場の設定
イメージの拡大、深化、修正の支援としての材料集め、試しの活動の保障

(教科の価値、本質のとらえなおし)

- 造形活動を自分の内面との対話、自分らしさや自分の新しい面への気づきの場としてとらえる。
- 自分の価値観を自ら育んでいく活動、自己実現の場として考える。

以上の研究推進によって、よく見、よくふれ、気づきや感じ取る力が育ってきた。また、互いの気づきや感じ方の違いを共有することで、友だちを認めること、そして自分の内面との対話が形成されてきた。また、ひとりひとりの思いが育まれてきたと考える。

さらに、思いの実現のために、見通しをもち、自分らしい表現方法をさぐり（試行錯誤）、自ら選択、決定していく力を育むことを研究の柱としたい。「自立」という視点からのステップを焦点化した研究を推進することになる。



2 研究の方向性

図画工作科として「自立」のとらえ

「自立に向かうめざす子ども像」

- ◎自分で活動の見通しをもつことができる子
- ◎よりよいものを求めて試行錯誤を繰り返せる子
- ◎課題解決のための必要な方法を考えることができる子
- ◎友達のよさを認め合える子

- 高学年 ◎自らの計画を立案し、見通しをもつことができる子
◎必要な素材、情報を収集することができる子
◎自分らしい価値を認め、友達のよさを受け容れられる子

- 中学年 ◎見通しを持てる子
◎活動に工夫や改善を加えながら活動しようとする子
◎よりよいものを求めて試行錯誤を繰り返せる子
◎じぶんらしさを思う存分、表現できる子
◎友達のよさを認め合える子

- 低学年 ◎活動に夢中で取り組もうとする子
◎素材集めを喜んでしようとする子
◎友達と楽しく活動に取り組める子ども

(授業レベル)

- ・より主体的な学習者づくり、「自ら求め、判断し、行動できる子ども」像にせまるための授業づくり。(人、素材、時間、空間の保障)
- ・鑑賞領域の研究

(教育過程レベル)

①教育過程の見直し

年間指導計画全体の再編、題材の配当時間や配当の検討と工夫の推進

◎本校で創造していく新教育過程の総合学習との関連により、以下の三分野の題材構成を検討する。

- ア 他教科との合科的な扱いができるもの
- イ 図画工作科の教科の特質に関わるもの
- ウ 総合学習に含めることが可能なもの

具体的には、本校出版の「平成8年度 教育過程の編成」図画工作科年間指導計画一覧表の中にア、イについてはしめしている。今後、平成9年度の総合学習の編成に向けてウの総合学習にふくめるものについて検討していく。